

みんなの只見線

全線開通までの地元ならではの楽しみ方

2018年6月に始まったJR只見線の復旧工事から四年後の今年5月18日、福島県とJR東日本が全線再開日が十月一日に決まったことを発表しました。金山町にある二つの橋梁の架けかえと一部流れてしまった橋梁の改修工事が終わり、今只見線の線路は11年ぶりに、全長135・2kmの端から端までつながっています。

S【個人で撮影した写真などをインターネット上で発信して交流している場所】で見かけるようになりました。

今年の冬は、叶津川橋梁の上を走るロータリーモーターカー【通称ロモとよばれる除雪車両】を見つけ、線路上を走る車両に感激して、思わず動画を撮影しました。普段は見られない珍しい車両が頻繁に行き交う様子を見られるのも、復旧工事が行われている今だけです。全線再開前に只見―会津川口区間を通る際に探してみてください。

私は父が国鉄職員（現在のJR東日本）で只見線の保線の仕事をしていたため、小さいころから只見線を身近に感じていました。はたらく車や作業している様子を見るのが好きなのも、父のことを重ね

全線再開日が発表されると、不通区間に目をやる人が増えたのか、作業車両のマルチプルタイタンパー（線路を持ち上げて、下にあるマクラギ【枕木】やバラスト【線路に敷かれた砂利】の隙間をなくして線路を正確な位置に整理する役割の車両）や軌陸車【道路上と線路上でも作業できる車両】をたびたびSN

で見ているのだと思います。また、母と一緒に病院へ行くため、月に一、二回会津宮下駅まで列車に乗って出かけた時にキヨスクで買ってもらった絵本や、車内で会った父の同僚の方との会話も、今でも小さな幸せの思い出として残っています。私にとつて、只見線は家族との思い出や自分自身の記憶と重なっています。そのためか時折、只見線の車内で、どこかの家族が楽しそうに乗っている様子を見かけると、嬉しくてつい話しかけてしまいます。

先日、奥会津では初めて、映画「霧幻鉄道×只見線を300日撮る男」の上映会が只見町で行われました。コロナ禍で何度も延期され、ようやく今年1月に会津若松市で上映され、県内では、福島市と

只見線地域コーディネーター

酒井 治浩
さかい はるこ

いわき市で先行上映されてきました。七月末には東京都内で上映が予定されています。湯ら里で行われた上映会では、主役の星賢孝さん、そして監督の安孫子亘さんが話をしてくださいました。映画とトークイベントから、星賢孝さんの人柄と、奥会津と只見線に対する情熱が伝わってきました。安孫子監督が只見線を応援する様々な人たちに出会い、その情熱とひたむきに活動する星さんの姿に感動し映画をつくらうと決めたそうです。湯ら里のスクリーンで見た奥会津の映像は、まるで知らない国の風景に見えるほどに幻想的で美しいものでした。これから観られる方のために詳しくは書きませんが、星さんもまた、ご両親の影響を受けて奥会津に残った一人と知り、今まで以上に親近感が湧いてきました。

只見線全線再開まであと80日あまり。只見町内でも映画上映を皮切りに、全線再開を

知らせるお祝いの垂れ幕ができあがり、あちこちで見かけるようになりました。開通前の今だからこそ体験できるイベントも予定されています。只見線に興味がある人はもちろん、分らないけど楽しそう、友だちに誘われただけという方も、ぜひこの機会に色々参加してみてください。新たな歴史が刻まれる「只見線」で、みなさんの新たな思い出ができることを願っています。



▲作業中のマルチプルタイタンパー